

上巻

「桐壺」 ～ 「朝顔」 18公演

CD 9巻 36枚

第一回公演 「桐壺」 きりつば

【あらすじ】
光源氏の父母である桐壺帝と桐壺更衣の悲恋は、身分や境遇を越えた激しい破滅的な愛で、その後の光源氏の生き方に大きな影響を与えます。



桐壺

第二十一回公演 「初音・胡蝶」 はつね・こちよう

CD 10巻 40枚

中巻

「少女」 ～ 「幻」 20公演

【あらすじ】

六条院は新春の華やきに満ち、光源氏・紫上を中心に理想的な体制がスタート。桜の盛り、紫上は紅葉のお返しにと桜と山吹を折って胡蝶姿の童に持たせ、二艘の舟に乗せて隣の秋好中宮のもとに。そうした中で光源氏が玉鬘に…。

【解説・三田村】

「初音」の巻というのは、戦があつた時代に非常によく読まれた巻なんです。つまり、これは平和を回復したつていうことの喜びを表す、そういう巻でありまして。「応仁の乱」もそうですけども、江戸幕府が開かれた時に、徳川家康が、『源氏物語』を教えて欲しいとお茶室で伝授を受けて、一番最初に読んだのが、この「初音」の冒頭なんです。家康はとても高く小さい声で読んだと、その当時の記録に残っています。どんな感じだったんでしょうか？

年たちかへる朝の空のけしき、なごりなく曇らぬうららかに、数ならぬ垣根の内だに、雲間の草若やかに色づきはじめ…

【お客様の声】 私の宝物！能(観世流)に『源氏物語』を題材にした演目があり勉強しているのですが、五十帖すべてが揃い、耳で聞いてわかり、情景を想像できるのが嬉しい。(東京都 60代 女性)

下巻

「匂宮」 ～ 「夢浮橋」 15公演

CD 8巻 30枚

第五十回公演 「浮舟一」 うきふね

【あらすじ】
浮舟が薫によって宇治に開われていることを突き止めた匂宮は宇治を訪れ、彼のふりをして浮舟と結ばれます。ところが薫は浮舟の変化に女としての成長を感じ取るばかり。やがて匂宮は雪の中、浮舟を対岸の別荘に連れ出し…

【解説・三田村】

月が出ている、そのころにですね、一端近く一宇治川を眺めています。一男は、過ぎにし方のあはれをも思し出て一薫の方は、過ぎにし方、「大君と一緒に眺めたなあ」と思つて眺めているのに、女は、一今より添ひたる身のうさを嘆き加えて、「これからどうなるだろう？」と匂宮の方に心がいつている。男は過去、女は未来を見ている。二人で並んでその宇治川を見ているながら気持ちはずれ違っている。非常に皮肉な場面ですね。

朔日ごろの夕月夜に、すこし端近く卧しながらめ出だしたまへり。男は、過ぎにし方のあはれをも思し出て、女は、…。

第二回公演 「雨夜の品定め」

あまよのしなさだめ(「帚木」より)

【あらすじ】

十七歳の光源氏が恋の冒険をするきっかけともなった、宮廷の雨の夜に繰り広げられる男たちの遠慮のない女性評論の場面。なぜ物語の始めに、女性に辛辣な評が書かれるのかを見ていきます。

【解説・三田村】

多分、この作者が女性だけを読者に考えたくなかったということですね。漢文を大変勉強していて、学者の父親の影響も受けている紫式部という人が、物語なんか読む人じゃないと思われていた男性たちも含め、もっと広い読者を獲得しながら、自分の新しい物語を書いていきたい。それは光源氏の恋の物語であると同時に、男たちに関心のある政治の物語でもあるし、彼が成り昇つて行くドラマでもある。そういう意識がこういう複雑な書き方を要請したんだろうと思います。

長雨晴れ間なきころ、内裏の御物忌さしつづきて、いとど長居さぶらひたまふを、大殿にはおぼつかなく恨めしく思はれたれど、

【お客様の声】 家に居ながら、現代最高の「朗読」と「解説」を一度に聞くことができ嬉しいです。何回も聞いてもいい。毎日が楽しみです。(広島県 30代 女性)



浮舟

【お客様の声】 光源氏が活躍する頃も好きですが、「宇治十帖」は薫と匂宮の性格の違いが面白い。読んでいると母の気持ちになり、じれったいやら…。(埼玉県 50代 女性)